



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報

第10号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2012年3月23日

〒980-8576 仙台市青葉区川内4-1 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL <dosokai@intcul.tohoku.ac.jp>

旅への誘い

小林 文生

(国際文化研究科同窓会会長、ヨーロッパ文化論講座教授)

昨年は、東日本大震災の影響で同窓会総会を開くことができず、会報の紙上だけのご挨拶となりましたが、あれから1年が経ちました。同窓生の皆様には、それぞれの思いを抱きながら、いつもとは異なる時間の流れの中で過ごしてこられたことと存じます。

ひとりひとりの経験が、それぞれにかけがえのない重みを持つものであること、それは、いつの時代でも、どこにいても同じはずですが、今年のあの時から今にいたる1年間は、ことのほかその重みを感じたように思います。被災者であるか否かというよりも、池澤夏樹氏が言うように「日本に住む者みんなが当事者であった」今般の災害では、日本中、涙を流さずに過ごせた日は1日もなかったと言っても過言ではないと思います。そして、この3月11日に震災1年目を迎えて、午後2時46分に、1年前のあの瞬間を思い起こして思わず身構えた人も多かったのではないのでしょうか。

同窓生の皆様、とくに仙台を既に離れていらっしゃる皆様には、研究科ホームページや『国際文化研究科広報』等を通じて、その後の様子をお伝えしてきました。国際文化研究科の建物（東棟）は、応急危険度判定で「要注意」とされましたが、5月6日には入学式を行い、無事に新学期を開始しました。1年を経た現在も、建物の内外の壁に無数の亀裂がそのまま残っており、補修工事の着工を待っているところですが、教育研究はすっかり平常の活動を取り戻し、この春にもめでたく博士、修士の皆さんが修了します。昨年9月に修了した皆さんも含めて、今年度はとくにこのような困難な状況を克服して論文を仕上げたことに、心から祝福を送りたいと思います。

そのように困難を乗り越える力は、どこから来るのでしょうか。それは、きっと経験の共有にあるのだと思います。しかも、自他の境界をも忘れさせるほどの巨大な何かを前にした、きわめて衝撃的な経験であるだけに、共有の質も濃密なものになったと思います。震災直後の研究科教員の会議で私は、新

聞に掲載された瀬戸内寂聴さんの記事に書かれていた「心をついに」という言葉を引用して、復興への歩みを呼びかけましたが、院生の皆さんもまた、まさしく心をついにして、いつも以上に支え合い、切磋琢磨してきたことと思います。

思えば、研究を進めるとき私たちの作業は、この「共有」から始まっているのかもしれませんが、必ずしも同じ出来事や経験の共有だけではなく、時間や空間を越えて、自分の心に触れるものに共感し、あるいは驚嘆し、自分の知らなかった何か、自分をはるかに超越する何かを、誰かとともに共有する。その誰かととは、たいていの場合は、芸術家、科学者、思想家、作家など、偉大な先人でしょう。フランスの大作家マルセル・ブルーストは、それを旅に喩えて次のように言っています。「ただ一つの本物の旅行、若返りの泉に浴する唯一の方法、それは新たな風景を求めに行くことではなく、別な目を持つこと、一人の他人、いや百人の他人の目で宇宙を眺めること、彼ら各人の眺める百の世界、彼ら自身である百の世界を眺めることだろう。」

私たち研究科の同窓生も、それぞれの旅に出立して、未来にわたってその旅を続けることになります。私は、この会報第8号で国際文化研究科を「心の地図の港」に喩えましたが、遙か彼方への大いなる旅を誘う活気あふれる港として、本研究科は皆様の実りある船出をこれからも見守り続けてまいります。

第10回同窓会総会と講演会のご案内

第10回同窓会総会と講演会を次の通り開催します。またこれに引き続き国際文化研究科平成23年度修了祝賀会が開催されます。同窓会会員の皆さまにはどちらにも奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時：2012年3月27日（火）15時～

*研究科学位記伝達式に引き続き開催しますので、会員の皆さまは14時20分の学位記伝達式からご臨席ください。

場所：マルチメディア教育研究棟6階大ホール

講師：吉田 達（中央大学理工学部助教・

ヨーロッパ文化論講座前期課程修了）

演題：「鶴見俊輔の＜限界芸術＞論をめぐって」

国際文化研究科同窓会事務局

第18回国際文化基礎講座の報告

第18回国際文化基礎講座(平成23年11月)では「災害を生きる—その文化的諸相—」と題して、本研究科の3教員が日頃の研究の一端を披露されました。

ここにその講義概要を紹介します。



災害リスクとインフラ整備 — ヒト・モノ・カネそれぞれの視点から — 柳瀬 明彦(国際経済交流論講座准教授)

今年度の公開講座のテーマ「災害を生きる」に合わせて、経済学の立場からこのテーマに関して何をお話しするべきか、講師の指名をお受けした後いろいろ考えましたが、「リスク」と「インフラ」がキーワードとして思い浮かび、それを講義のメインテーマにしました。当日は、主に前半で「リスク」について、後半で「インフラ」について、それぞれ関連する話題を経済学の基礎理論やデータを交えながら議論を進めました。

自然災害は、その発生自体を事前にコントロールすることがきわめて困難な現象であり、またいったん発生すると、それによる被害は予想を大きく超えるものになることもあります。具体的には、死亡あるいは健康悪化に伴う人的資産の減少、家屋や生産手段などの物的資産の喪失、企業の生産性や資産価値を下げることに伴う金融資産の減少などが挙げられます。経済学の重要な概念の一つである「リスク」とは、人間の生活維持や社会経

済活動にとっての「望ましくない事象」の不確かさの程度、およびその結果の大きさの程度を意味しますが、こうした災害のもたらす経済的ショックはまさにリスクの典型例であるといえます。

ただし、地震やその他の天変地異の発生自体は人間の力では制御できないものの、それが「災害」となってしまうリスクを制御することは不可能ではありません。防災投資による住宅や建物の耐震性や耐火性の強化、水・食料や生活物資等の確保、災害保険の加入によるリスク・ファイナンスといった「事前の備え」は、災害リスクの軽減において重要な役割を果たします。

保険加入によるリスク・ファイナンスについては、ミクロ経済学の期待効用理論の考え方がベースとなっているため、その説明を行いました。リスクの存在が保険の加入を促すのは、人々が「リスク回避的」である、つまりリスクの存在による所得や資産の変動が存在する状況に比べてこうした変動がない状況を人々は好む、と通常考えられるからです。リスク回避的な人々にとっては、所得が変動するリスクを完全に避けることが仮に可能ならば、そのために保険料(リスクプレミアム)を払った方が望ましいということになります。

災害リスクの軽減においては、「事前の備え」と「事後の復旧・復興」両方において、インフラ整備の果たす役割が重要なのは言うまでもありません。ここでインフラ(インフラストラクチャ)とは、狭義には鉄道線路、道路、空港、港湾などの交通手段の通路施設を指しますが、広義には司法、教育、警察・消防、保健、国防、交通・通信など社会の基礎を形成する制度や施設を指しています。経済学的には、これらインフラは公共財あるいは社会的共通資本の概念を用いて説明されます。あるインフラ整備について、その計画を実施すべきか否か、またどの程度の規模にするかの判断や代案間の比較評価は、「費用便益分析」に基づいて行われます。これは、インフラ整備のために投入した費用と得られる便益(災害リスク減少の金銭的評価額)を測定、対比し、どの方法が最も効率的かを決定するものです。ただし、投資費用は計算が比較的容易である一方、便益を計算するのは難しいという問題点があります。

災害による被害について、先進国と発展途上国

を比較すると、いくつかの興味深い事実が浮かび上がります。被害の発生頻度は先進国と途上国との間に大きな違いはなく、被害額は先進国の方が途上国に比べて多額になっています。一方、犠牲者数に関しては、所得水準の高い国ほど、また民主化の進んだ国や所得の不平等度の低い国ほど、少ないという結果が得られています。

途上国における先進国の方が災害発生に伴う被害額が大きいのは、途上国に比べて質・量ともに高水準にある先進国の物的インフラが災害によって壊滅的な被害を受けることに伴い、損害額も膨大になるためであると考えられます。このように物的インフラへの影響、特に電気・ガス・水道といったライフラインや鉄道・道路などの交通網に多大な損害が発生した後、これら物的インフラの復旧整備も含めて生活や経済活動をどう再建するのか、また地域の再開発、被災者の支援などをどうするか、を今度は考える必要があります。東日本大震災後の東北三県そして日本がまさに直面する問題であり、講義では最後にいくつかの論点についてまとめました。

私の専門分野は、経済学の中でも理論的なアプローチによる研究で、データや個別の事例を扱うことはほとんどないため、今回の公開講座では私自身の研究をご紹介できず、結果的に他人の研究の紹介に終始してしまいました。また、「災害経済学」なる経済学の学問体系はまだ完成されていないため、講義の内容も散漫なものであったように聴講された方々には感じられたかもしれません。講師である私の力不足を痛感する次第です。それにもかかわらず、熱心にご聴講くださり、貴重なご質問やご感想をいただいた皆様に、心より感謝申し上げます。



自然の畏敬 — 日本とヨーロッパに見る風景の受容 — 石幡直樹 (多元文化論講座教授)

元来は森羅万象を意味した「自然」という言葉は、18世紀後期に英国ロマン派詩人の作品に歌われているように、その意味が大きく縮小され「緑の景観」を指すようになる。このロマン主義的「自然」は、人為、人間、町、科学、書物、人工など多くの対立概念を生み出し、産業革命以降の科学技術の発展によって都市に対する反感も醸成した。当時を代表する自然詩人ウィリアム・ワーズワス(1770-1850)を崇拝し、ヨーロッパ・アルプスを称賛した美術批評家ジョン・ラスキン(1819-1900)は『近代画家論』で、自然そのものを考察するために、前提や想像によって妨げられることなく風景を観察することを推奨している。

他方、東洋的思考では「自然」を「おのずと存在(生成)するもの」と解し、それには天地人と人間の精神や道義も含まれるとされ、「自然」は主客同一の存在であった。日本でも「自然」とは道徳をも含む包括的な意味をもち、名所絵や山水画のように、風景には象徴性や精神性が重んじられた。しかし、明治時代になると西欧文明が浸透し、科学的観察と客観的世界観に基づく近代的自然観が紹介され、ラスキンの著書も翻訳され多くの読者を得た。ラスキンのアルプス称賛は、客観的にしかし敬虔な気持で周囲の自然を観察し鑑賞する態度の重要性を伝え、日本人の自然を見る目を啓き芸術的靈感を創出した。

「日本のラスキン」と呼ばれた地理学者志賀重昂(1863-1927)の『日本風景論』はラスキンの『近代画家論』に多くを負うが、風景に対する興味を涵養したばかりでなく近代登山の普及にも貢献した。ラスキンに心酔し、『日本アルプスの登山と探検』によって「日本アルプス」の名を世界に広めた英国人登山家ウォルター・ウェストン(1861-1940)は、西欧諸国同様の絵画的な美の鑑賞とスポーツ愛好精神を融合した近代的アルピニズムを日本に打ち立てた。

志賀に触発されて登山を始めた小島烏水(1873-1948)は、ウェストンに鼓舞されて日本山岳会を創設し、日本の登山家は「風景の発見」と

いう転機を迎える。鳥水は「日本アルプス」の呼称を定着させた著書『日本アルプス』で、やはりラスキンを称賛している。若い頃鳥水の愛読者で、山岳紀行を多く残した英文学者田部重治（1884-1972）は、ワーズワスの詩を翻訳したばかりでなく、彼の自然観に大きな影響を受けた。少年時代のワーズワスは、動物的な喜びに没頭して自然を意識することもなかった。青年期の彼は自然と一体となる熱望にとりつかれ、思索も観念も無用であった。その後、自然と以前の自我を穏やかな眼で振り返る境地に達した。このワーズワスの精神遍歴を辿るかのように田部は、自然に対する渴望と畏敬、そして自我と自然との対比を経て、利己主義を克服した自然との調和を感得する。

英国湖水地方を含むヨーロッパの風景の発見によって形成されたロマン主義にもとづく近代的自然観は、これらの著述家・登山家によって、ワーズワスの愛でた湖水地方からラスキンの賛美したヨーロッパ・アルプスを経て日本アルプスへと伝わり、これらの人々の作品を読む我々にも継承されている。その意味で私たちは彼らの後継者なのである。ワーズワスから田部重治へとつながる道は、彼らの周辺に位置する日英両国の著作家を通して、人が自然をいかに受容し理解し共生の方途を探るかという、人間存在の根源に関わる課題を提示し、その解答を得るための示唆に満ちている。

同時に、近代的自然観の展開には、ラスキンが指摘するように、近代的自我意識の誕生と拡大というロマン主義のもうひとつの側面が付随する。それが、自然対人間や自然対人為という二元論を生んだ。ワーズワスと田部が体験した自然との交感における三段階は、彼らの自我認識をめぐる葛藤の表れである。ワーズワスや田部のように、自然と自我のせめぎ合いの調和をはかることのできた人間もいるが、自然と人間すなわち他者と自己との対立は、以後人間精神の中に基盤構造として残り、その収束は我々個々人の問題となる。自然の公平なる美に対する無我の愛を探し求めた彼らの思索の過程は、人間に運命づけられた自然との共生を体現している。時空の隔たりはあるが、彼らの自然観は確固とした呼応を見せ、それは私たちにも共通することを教えてくれる。

西洋から伝播した、自然対人間の二元論を内包

する近代的自然観を受容しながらも、我々日本人の自然観には古来の伝統もまた脈々と息づいている。近代的自我の存在と意義が伝えられ、それを意識しそれにまつわる葛藤を経験しながらも、我々の精神の根底には主客未分で、人間の精神と万象を包括する、東洋的なそして日本固有の「自然」もあったのだろう。はからずも、今回の震災にじっと堪える日本人の姿に世界が感じ取り、驚き、称賛したのは、このような我々の精神の根源に存在する、自然を道義の導き手と捉えて抱く畏敬の念だったのではないか。



ラスキンの描いたマッターホルン（1849）
The Works of John Ruskin (London: George Allen, 1904)より



ウェストン登山当時の槍ヶ岳（撮影・保里高政）
Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps.
(1896. Tokyo: Edition Synapse. 1999)より

東日本大震災のがれき処理と復興について

劉 庭秀（国際環境システム論講座准教授）

東日本大地震が起きてから1年が経った。ところで、想像を遙かに超える量が発生した震災廃棄物の適正処理とリサイクルには、予想以上の時間がかかっている。震災廃棄物の発生量が多かったのは事実であるが、震災廃棄物の処理について、政府と各自治体の姿勢に大きな隔たりがあり、スクラップ業界も混迷を続けている。つまり、震災後の廃棄物処理及びリサイクル政策に一貫性が見えない。実際、一部の被災地では通常の相場とは関係なく、スクラップ価格が高騰したり、殆ど無償で取引されたり、自治体によってはスクラップの移動・処理コストに5倍以上の差があるなど、混乱が続いている。勿論、一連の出来事に妥当な理由があり、行政と関連業界が社会的な説明責任を果たすことができるのであれば何の問題もない。しかし、その方法と時間の問題だけではなく、被害状況、被災自治体の財政力、住民のニーズ、インフラの被害状況、仮置き場の有無、地元業者の設備と能力等々を検証する時間が無かったのだろうか。



一方、雇用拡大の受け皿としてリサイクル業界を注目する人々も少なくない。人の手による選別作業、資源化プロセス導入による雇用創出とコスト低減、資源回収による資源循環を期待している地域も多い。また、様々なスクラップのリサイクルと震災廃棄物処理技術の発展も期待できるだろう。しかし、殆どの震災廃棄物は震災後3年以内に焼却処理されることが決まっており、円高による景気低迷と製造業の海外移転によって日本国内のスクラップ発生量が減少している。これらの現状を直視し、費用対効果の検証がなければ、短期的な効果しか得られない。

今回の大地震によって発生した震災廃棄物を一日も早く、迅速、かつ衛生的な処理するとともに資源化率を引き上げることが最大の課題である。被災

地の復興再建のためには、一律的な政策に依存するのではなく、各被災地の現状とニーズをよく把握した上、柔軟な政策決定が望まれる。



しかし、まちの中から消えつつあるがれき類の適正処理や資源化は想像以上の時間がかかっている。責任の所在や役割を明確にすることだけではなく、関係者の複雑な利害関係、不正確な現状把握、被災者への配慮不足、曖昧な政策決定、財政支援の遅れ、情報不足と混乱、震災廃棄物の受け入れ拒否等々、多くの問題が山積している。ところで、どうしてこれらの問題が解決できないのだろうか。震災や円高で苦しい状況にあるとしても経済大国であり、最先端の技術を持っている日本に、今必要なことはなんだろうか。本研究科の東北大学総長裁量経費事業の研究代表として4月から宮城県をはじめ、福島、岩手の各自治体、被災現場、がれき置き場、がれき処理やリサイクル現場を回って感じたことは、未だに被災地には不安、不信、不平等、不足、不合理などの否定的な考え方が多かったことだ。少しでも前向きに考えて欲しいところだが、被災地から帰ってくる言葉は後ろ向きの発言が多かった。震災から1年が経とうとしている今、「頑張ろう」、「絆をつくろう」、「前を向いて歩んでいこう」といったスローガンだけでは、被災地の皆さんを安心させ、復興のための明るい青写真を提示することはできない。

千年に一度と言われる大津波被害なので的確な判断は難しいかも知れないが、被災地の復興のために活動するのであれば、明確な目的と目標を定めた上、相手に大きな安心と信頼を与えることが重要であろう。また、被災地の復興のために活動している様々な団体、行政機関、関連企業、研究機関の間において十分な情報交換やコミュニケーションが殆どとれていないことも問題である。復興事業は自治体、企業、特定団体や研究機関が競う場ではない。少しでも早く、少ない費用で、被災地の皆が本当に望んでいるものは何かを考える必要がある。お互いの目線を合わせていくことで、すぐ実行できることが見えてくるのではないだろうか。

国際文化研究科主催公開講演会・関連行事の報告

研究科主催講演会

「風土と縁起と天災・人災」

坂巻 康司（比較文化論講座准教授）

平成 23 年 6 月 27 日（月）、著名な日本学者であるオギュスタン・ベルク教授をフランス国立社会科学高等研究院からお招きし、『風土と縁起と天災・人災』と題する講演会を国際文化研究科主催で開催いたしました。ベルク氏は『風土の日本』（篠田勝英訳、ちくま文庫、1992 年、原著は 1986 年）など、日本の自然と文化に関する数多くの卓抜な研究書の著者として知られ、特にフランスでは日本研究の第一人者と見做されている方です。また、かつて氏は東北大学に研究員として滞在したこともあり、東北地方の自然と文化のあり方にも通曉された方です。この講演会は東日本大震災の影響で開催自体が危ぶまれておりましたが、ベルク氏側の熱意と研究科側の希望が見事に一致し、実現に漕ぎ付けることが出来ました。一か月ほどに亘って続いた今回の講演旅行において、氏は仙台の他、東京、名古屋、京都、札幌などの主要都市において講演会・シンポジウムを精力的にこなされ、さながら約 30 年に亘って続けて来られた日本研究の総括をされるかのようでした。

幾つか準備された興味深い講演題目の内、ベルク氏は東日本大震災を見据えた上記のような題目を選択されました。元々自然科学を専攻されていた氏にとって、文化の形態を「自然との共存」という観点から分析する姿勢は常変わらぬものであり、それは 30 年を越える氏の執筆活動の基軸となっていたと言えます。今回の講演会においても、自然と文化のつながりに関する氏ならではの独創的考察を繰り広げられ、日本文化とその風土に関する並々ならぬ知見を披露されました。氏の研究は「日本学」の一つと見做されておりますが、今回の講演はそのような狭い枠組みを越えて、「人間の自然との共存」という遥かに大きな主題へと向かって行くかのように感じられました。

例えば、数多く語られた興味深いトピックの一つにこのようなものがありました。「太平洋上のある島で巨大地震が起きたとする。しかし、そこに人が住んでいなければ、何の騒ぎも起きることはない。つまり、「震災」というのは人間がそこにいるから生じ

るのであり、そうでなければただの「現象」に過ぎないのだ。余りにも当たり前のことなので聴き逃してしまいそうになる話ですが、そこから氏は「あらゆる『天災』は『人災』となり得る」というテーゼに辿り着きます。高度に発展した現代世界の根本的な問題を見事に捉えた考え方と感じられました。講演会にはかつて氏が研究員として滞在した研究科の同僚や、当時からの親しいご友人が駆けつけられたこともあり、氏は終始なごやかにその語りを進められました。今回のような大震災を経験した後の日本人の生き方や、人間と自然とのつながりをどのように考えたらいいのか。そのような究極的な問いに真正面から立ち向かい、世界各地を旅しながら思索を続けるベルク氏は、象牙の塔に籠った学者ではなく、「人間を深く愛する行動する思索家」であるということが強く印象付けられました。講演後、聴衆からは活発な質問が投げかけられ、震災直後ということ忘れさせる実に充実した講演会となりました。

東北大学大学院
国際文化研究科講演会

TOHOKU UNIVERSITY

日本語による講演
無料

天災・人災
縁起と風土と

講師
オギュスタン・ベルク氏 Augustin Berque
フランス国立社会科学高等研究院 (EHESS) 教授

日時
2011 年 6 月 27 日（月）
16 時 30 分～18 時 00 分

場所
東北大学川内北キャンパス
教育・学生支援部大会議室

アクセス
市バス 710/713/715/717/719 系統
「東北大学入試センター前」・「川内北キャンパス」下車

主催 東北大学大学院国際文化研究科
共催 日仏学会フランス専攻所、仙台日仏協会・フランス・フランスーズ
連絡先 東北大学大学院国際文化研究科後援研究室 (022-795-7688)

研究科共同研究プロジェクト
「世界のエスニック・マイノリティ比較研究」
寺本 成彦 (ヨーロッパ文化論講座准教授)

プロジェクトの主要行事として、本年1月28日にドキュメンタリー映画『プロミス』(2001年、米)を上映後、講師の石川雅之氏(行政書士、「パレスチナと仙台を結ぶ会」主宰)とハテム・エルアッサ氏(仙台在住パレスチナ人)に解説をしていただき、一般市民も含めた参加者との質疑応答をしていただいた。

『プロミス』は、ユダヤ系アメリカ人J・シャピロとB・Z・ゴールドバーグ、それにメキシコ人のC・ボラドの共同監督になる作品。1993年に調印されたオスロ合意を受け、「ピース・プロセス」がかつてない希望を感じさせていた時期に、パレスチナとイスラエル双方の子供達に密着してインタビューしながら、エルサレム市街地や難民キャンプでの彼らの生活、敵対する相手方のコミュニティについての考え、困難な未来に向けての展望を取材した記録である。とりわけ、映画末尾近くにおいてイスラエル人の双子の兄弟がパレスチナの難民キャンプを訪問、パレスチナの子供達と共に一日を過ごし、将来に向けた自らの考えを語り合う場面は出色であった。

まず石川氏は、映画製作上での監督たちの公平な視点と、登場する子供達の真摯な声を評価するものの、この映画の「限界」も指摘された。2000年に始まった第2次インティファダ(民衆抵抗運動)、2008年末から2009年にかけてのガザ地区総攻撃によってオスロ合意がすっかり反古にされた今現在、政治家を含めたわれわれ大人の責任は棚上げにして、「子供達の交流があれば、問題は解決される」という誤認を生じさせかねない。また、パレスチナ問題の長大な年譜を見てもわかるように、1948年以降のパレスチナ人とイスラエル人の悲劇的關係は、前者が後者から一方的に略奪される歴史に他ならない。そのような歴史的文脈を無視して、「お互い様」(イスラエル人の子供の発言)だと見做すことの根本的な誤りを明確にされた。

次にエルアッサ氏は、ピース・プロセス開始2年前、1991年に親族を訪ねてガザ地区に帰った思い出話

から解説を始められた。もともと類似した文化的背景もあるため、同じ年頃の親しいイスラエル人の友達もできたが、映画に登場した強硬派の子供のようにパレスチナ人との宥和関係を拒絶されたという苦い記憶、また破壊された元の我が家の訪問を祖母と共に試みたが(映画の登場人物とは違い)、イスラエル兵に阻止されてそれも果たせなかったことなどが紹介された。「パレスチナ人がしていることは、テロではなく、抵抗運動ではないのか」という会場からの問いかけに対して、「侵略者に対して抵抗する権利」について言及されたが、「結局のところ私にはイスラエル人を憎むことができない。息子にも“ヨセフ”というユダヤ系の名をつけている」というエルアッサ氏の結びの言葉が印象的であった。

憎しみを超えて相互理解に努め、パレスチナの地での共存を旨とした和平の道筋をたどり直すことが、敵対する(しかし文化的には相似た)2つのコミュニティの心ある人達の願いであること—それが映画に登場する子供たちの発言にも確認された。最後に石川氏は、「大震災でいわば“難民状態”となった隣人を私たちが持つ今こそ、長らく迫害を受け苦難を経てきたパレスチナ人への想像力が働き、遠く離れた彼らの境遇への理解の回路が開かれる可能性があるのではないか」と指摘され、参加者一同の共感を呼んだ。



事務局より

①同窓会メールマガジンについて

事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思います。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。

②メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会

<dosokai@intcul.tohoku.ac.jp>

③同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、その他の資料を掲載していますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/dosokai/>

④同窓会懇親会について

事務局では今後とも会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので開催希望などお寄せください。

⑤ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願います。お寄せいただいた個人情報は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

⑥会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条第1項及び12条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

○入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生:

6,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生:

編入学者: 8,000円

進学者: 6,000円

○上記以外の方(修了生、在学生、現教職員・元教職員等)にはご寄付という形のご支援をお願いします。

○会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口にご納めください。

郵便振替口座名称: 国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号: 02220-5-66621